

## 野口大兄『日本原記』に寄せて

村尾 行一

まえがき

野口幹夫大兄はその労作『日本原記』で、「日本の神社の本質は縄文にある。それは民衆の”祭り“だ。弥生時代以降に神社は支配者のための道具になった。日本の神社はこの二つの違った傾向のせめぎ合いだ」という新説を提示されました。このような縄文時代から現代までの神社の変質過程を考察した神道史論は大兄ならではのユニークな労作であります。これは多くの神社を歴訪された成果という、まさに“足で書かれた”史学です。併せて「石器語からの縄文語とアイヌ語の分離」等瞠目すべき原日本語論を大兄は展開されておられます。この高著に誘発された私は、①高等宗教とされるキリスト教のカトリック（普遍）が如何に民俗化しているか、②縄文時代の農業とは何か、③現代体制の病理を考えてみました。この拙稿はその愚考を述べたものです。

私の専攻分野である林学は神道史の研究を抜きにしては成立しえないのです。明治期に行われた伊勢神宮林の創設、その式年遷宮用材を供給してきた木曾谷檜林利用の変遷、従来の神社境内林はスギかマツかの単純林が主流でありましたものを、大隈重信の強硬な常識論を粉碎して造成された明治神宮境内の近自

然林等は実例の一端に過ぎません。大兄が考察に多くの紙幅を割いて論じられた神社史は斬新な切り口で論じられておりますが、このような方法論での神社史論は類例を私は知りません。だから大兄の神社史論は私にとって貴重な教示なのであります。

日本語はかねがね私が強い関心を寄せているテーマです。日本語は近縁語が発見されていない孤立語であるからには、いわゆる方言を検討することが重要で、私の興味津々たる問題なのです。例えば私が今暮らしている愛媛県の伊予弁には万葉時代の日本語が残っているらしいのです。文化というものは中心部から周囲に伝播した後、古い文化が中心部で消滅しても周辺部では現役の文化として残るという経験則があります。そこで私はアイヌ語と琉球語に古日本語が活きているのではないかと推測しています。

この問題は比較言語学の一層の発展を俟たねばなりません。そもそも言語の担い手である文化において蝦夷地と琉球は類似点が多いと思います。食文化一つとっても両地域は共に昆布を愛用します。なお申せば生理的類似性でもアイヌ人と琉球人は毛深くて眼の窪みが深いのです。但し生理的類似性は血液型やDNA等を指標とする比較人類学的研究で容易に解明しえます。しかし言語の比較は生理的類似性の研究次元を超えています。例えばサンスクリット語やギリシャ語にドイツ語やモンゴル語のあれこれの単語の語源が求められますが、

これはとても生理的近縁関係云々では解けません。文化交流等、すぐれて社会科学・人文科学の次元の課題であります。だから例えば縄文語と八丈島の言語の関連性を渡来縄文人の原住民化に見出そうとする大兄の視角には卓越したものがあります。

しかし日本語学に暗い私は即座には大兄の当該論考に閑説することはできません。敢えてそれを行うことは傲慢というものです。この問題に係る愚見を述べることは他日を期したいと存じます。その際には当然ながら大兄のご教導を乞わねばなりません。

## A カトリックとドイツ人の習俗

### 1. カトリックは一神教か

大兄は精神の遍歴の終着点としてカトリックを主体的に選ばれました。そうした精神態度の大兄が本著で卓越した神道論を展開されました。私は当時珍しかったカトリック教会の附属幼稚園に通いました。そして後年、あの東大闘争に関与した罰として南ドイツ・バイエルン州（正式名称はバイエルン共和国）の首都に所在するミュンヘン大学経済学部林学科への“流刑”に処せられました。バイエルン、とりわけミュンヘンはカトリックが極めて濃厚な地域です。カトリックが人々の心の支えなのです。そんなカトリックが実生活の次元では如何なるも

のかが本 A 篇の主題です。なお余談ですが、ここもカトリック国のオーストリアは、とりわけチロルは言語から人情に至るまでバイエルンと同じなので、バイエルンを語る時にはオーストリアも含意します。なにしろ標準語の「今日は」が「ゲーテンターク」であるのに対してバイエルンとオーストリアでは「グリュースゴット」なのですから。そこでバイエルンとオーストリアの等質性をとくに強調したい時には「南ドイツ語圏」と申しておきます。

どんな宗教も時代により、地域により変質します。例えばコーラン原理主義だとアメリカや日本では信じられているイスラム教でさえ、今日のサウジアラビアのイスラム教と現在のインドネシアのそれとは別の宗教と思わすほど違いが大きいのです。後者のイスラム教は極めて寛容で諸宗教の共存を国是とします。イスラム原理主義には眉を顰めます。ましてテロなどは背教的だと言う人が少なくありません。キリスト教もまた多様でしょう。私はバイエルンで生活をつれて、カトリックは、とりわけ南部ドイツ語圏のカトリックは果たして一神教なのかを疑いだして行きました。その結論が、彼らの実生活に溶け込んでいるカトリックは「呼びかけられたもの」を原義とする「ゴット」すなわち「万物の創造者たる絶対にして無限の霊」のみを崇拜する一神教ではなくて、聖母マリアを最高神とする多神教だということなのです。

バイエルンでは都会といわず田舎といわずマリアで溢れかえっています。

人々は日常的にマリアを拝みます。なにかと「マリア」と唱えます。悲しみの時はマリアにすがります。喜びの時はマリアに感謝します。名前でも地名でもマリアが実に沢山あります。多くの教会がマリア教会です。そして至る所にマリア像が立っています。「マドンナ」つまりイエスを抱いたマリアの聖母子像がマリア像に勝るとも劣らず至る所に祀られています。察するに砂漠の冷厳な父性たるゴットより、温かく慈愛溢れる母性たるマリアが何倍も有難いのでしょうか。だからマリアの尊称は聖母なのであり、常に「アヴェ・マリア」（聖母への祈り）です。解る気がします。なお「アヴェ」とは「めでたし」が原義です。すると仏教的には唱題・念仏である「アヴェ・マリア」は「聖母への愛の告白」とも訳せそうです。

具体的な若干の事例をご紹介します。ミュンヘンの守護者はマリアです。だから筆頭の教会でありランドマークでもある教会は聖母教会です。壮麗なゴシック建築である市役所の前の、ミュンヘンの中心である広場はマリア広場です。私が住んでいたミュンヘン西部の狭い区部パーシングでも、ペストの流行から救って下さったマリアに感謝するため建てられたのがマリア巡礼教会という格式の高い教会です。寄進者はロマン派音楽の最高峰リヒャルト・ワーグナーの熱烈なパトロンだった「メルヘン王」ルードヴィク二世です。駅近くの大広場はマリア広場で、その中心にはマリア像が立っています。余談ですが世界で初めて近代

的総合大学に林学科を設置したのはこの「メルヘン王」でして、時は1878年、明治11年のことでした。

日本の神さんに相当するものは守護聖人です。その守護聖人の人数は無数と  
いってよいのです。例えば各市町村にも各職業集団にも各家畜にもそれぞれ固  
有の守護聖人がいます。毎日毎日が特定の守護聖人の日なのです。まさに八百万  
の神々です。森羅万象に神が宿っているのです。仏教の教義を援用しますと「山  
川草木悉有仏性」なのです。その上各種各様の天使がいます。「天使の群れに守  
られてお生まれなされた赤様は神の御子のイエス様」という一節のある讃美歌  
が愛唱されています。にもかかわらずこれら聖なるものを「神」としないのは、  
建前の一神教が土着の多神教と対立させないための方便に過ぎないのでしょうか。

## 2. カトリック圏の信仰的民俗

異教の神々とは先住民であるケルト人・ゲルマン人がキリスト教の浸透以前  
に信心していた土着の神々です。しかしキリスト教が追放したはずの異教神と  
その年中行事がどっこいキリスト教の、とりわけカトリック地域の民俗として  
生き残っているのです。中にはキリスト教最大の祝日まであります。それがクリ  
スマスです。実を言うとキリスト教はキリストの誕生日が判らないのです。だか  
ら誕生日とした日を変遷しました。例えば2000年頃は5月20日に祝われま

した。このことを端的に示すものは「クリスマス」の正確な訳語が「キリストの誕生日」ではなくて、あくまでも「キリストの誕生を祝う日」であることです。

この「祝う日」が彷徨の果てに確定したのが12月25日なのですが、これは元来先住民の冬至の祝日でした。そこで以下、主要な信仰的民俗をいくつか列示します。それが如何に異教的であるかが知りえましょう。

ア アラーハイリゲン：冬が始まる日。藁で作った聖人の像を自宅の門口や村の共有地に立てる。結婚占いの日。

イ アウストリーブ：牛を小屋から放牧して山の牧場に追い立てる日。

ウ バルトロメウス：秋の始まる日。収穫祭。天気占いの日。バター作りの日。

エ ブリギッタ：牛の保護聖人。産婦の保護聖人。

オ エリーザベット：妊婦の保護聖人。

カ フリッグ：愛の神。元はゲルマンの女神。結婚や分娩の守護聖人。

キ ファストナハト：冬の悪魔を追い立てるため仮装や仮面で行列する日。

ク フローンライヒーナム：子供の日。この日祭壇に供えた枝・葉・花飾りは魔除けの効能あり。

ケ ヤーレスフォイア：祝火の日。作物の成長・家畜の繁殖の予祝日。子供や家畜にとって残り火は病気を治す効能がある。

コ カールフライターク：日本のお宮参りに相当する日。乳離れの日。

サ クローネ：「花の冠」。成長と豊饒、処女性のシンボル。

シ レターレ：夏迎えの日。子供たちが家々を巡って菓子をおねだる。日本の亥の子に相当。

ス マイバウム：「五月の木」。病気や悪魔から家族や家畜を守る効能あり。

セ マイターク：「五月の日」。マイバウムを立てる日で、春を祝う村を挙げての大祭り。

ソ ニコラウス：家々を巡って良い子には贈物を与え、悪い子は罰する聖人。

タ ペトリシュトゥールフォイアー：春が始まる祝日。

チ フィングステン：夏祭り。

ツ サントマン：眠りの精。とくに子供を寝付かせる。

テ ウングリュクスターク：厄日の金曜日。

ト ヴァイナハテン：クリスマス。太陽崇拝起原の冬至・年始の日。

ナ オースタン：復活祭。太陽が力を回復する日。この日の卵を食べると無病息災。

ニ フライターク：金曜日。フリッグに捧げた日。ゲルマン人の信仰とキリスト教との習合の典型。南ドイツ語圏での厄日。旅行を避ける日。髪や爪を切ってはならない日。



### 3. 多即一

カトリックにはこれほど異教的・多神教的な習俗があるにもかかわらず一神教の様相を呈しているのかを考えると、それはゴットが異教の神々と祝祭を吸収・統合しているからです。つまりは西田幾太郎の「絶対矛盾的自己同一」すなわち「異なる物や事が異なるままに一つであること」によって多神教 vs. 一神教という絶対的矛盾をカトリックは多神教を自己と同一化したわけです。一言で申せば「多即一」です。

だからこそ土着信仰を超越して、普遍的（カトリック）な高等宗教に成りえたのです。そうでなければ信心が生理的でさえあるほどに頑固な異教徒でありましたゲルマン人らを「回心」（改宗）させることは不可能でした。

以上がバイエルンというカトリック的世界の真ん中で暮らした私のカトリック観であります。

## B 縄文文化と土の文化

### 1 縄文時代の農業

極々僅かな例外を除いて、圧倒的多数の学者は縄文時代を狩猟採取の時代とします。だから一般の人々も縄文時代を農業以前の時代と思っています。しかし私はこの常識を全否定します。それは所詮農業の起原を水田稲作の開始と考え

る「米本主義」からの狭隘な発想なのでして、縄文時代が農業無き時代ということとは実証されてはいません。逆に縄文時代の穀類等の化石が最近発見されているのです。文化的にも縄文時代が通説のように未開だとすると、どうしてあの巨大な建造物や感嘆すべき土器やらを造られたのでしょうか。しかも野口大兄が本書で明言しておられるように、縄文人は「交易の民」でもありました。しかもその交易はしばしば驚くほどの遠隔地間交易でした。だから縄文人は生産者・創作者であると同時に商業の人でもあったのです。したがって縄文文化は一個の文明を構築していたと言ってよいでしょう。

私たちの分野では縄文文化の卓越していた温帯の地域を豊かな「ナラ（ブナ）林文化圏」と申します。これは水田稲作を基層農業とする暖帯文化の「照葉樹林文化」と対をなすものです。「ナラ（ブナ）林文化」は東北アジアからの移入文化であるのに対して「照葉樹林文化」は西南アジアからの移入文化ではないでしょうか。そして文化の移入は当該文化の担い手の渡来抜きにはありえません。そして前者を縄文人、後者を弥生人であり、前者がより早くに渡来したとすれば野口大兄の民族移動に関する史観と吻合いたします。そして今日の日本文化は縄文文化の残り香を発する弥生文化の後裔であるだという野口史学ははなはだ説得的であります。

なぜなら私どもは日本を「ナラ（ブナ）林文化」と「照葉樹林文化」は併存す

るものとししますから、「縄文時代は弥生時代の前時代」と截然と時間軸で分断せず、「縄文文化は東北地方、弥生文化は西南地方」と長らく地域的に分存していたと考えているのです。なお申せば西南地方といえども南九州、とくにその山間部には縄文文化が残っているように思えます。

縄文文化を否定する「米本主義」の典型が桓武天皇の「征夷」です。「蝦夷征伐」とは四捨五入して言いますと、水田稲作の武力的な強要なのです。強要された人間集団は畑作民であることと彼らの生活圏からして、縄文人か縄文人の末裔でしょう。この「征夷」の現代版が首都圏等と東北地方の経済的政治的社会的心理的格差の発生です。この格差こそが東北を「原発銀座」にしたのです。だから原発の用地取得と稼働のために、さらには労働力雇用のために東北人は電力会社と政府に顔を札ビラではられました。したがって東電による原発事故は関電不祥事の劇症化に過ぎません。いずれも犯罪的でさえあります。なお、「原発は低コストで発電する」は為にする悪質なデマなのでして、重要な話題ではありませんが、本拙稿では割愛します。

## 2 木場作—縄文社会の下部構造

米といえば、縄文時代の農業は米も作っておりました。それは陸稲です。つまり縄文文化の下部構造は畑作なのであります。この「畑」という文字は国字、

すなわち日本製の“漢字”なのです。そして「畑」を分解しますと「火と田」になります。だから日本では焼畑が畑作の原点です。この焼畑農業を学者も一般人も「森を放火して行う地力略奪農業」「地力が枯渇するから、肥沃な土地を求めて移転する移動農業」と規定するのは、だがこの規定は事実誤認以外のなにもありません。

第一に、作付地には草や木が侵入し繁茂して作付面積が減少して行きます。ついに作付けの継続が不可能になるので、別の土地へ移動せざるを得ません。逆に言えば、焼畑を行っても草木これほどまでに繁茂させるのですから、焼畑はとも地力略奪農業なのではないのです。

第二に、換言しますと、これだけ草木が繁茂するのですから焼畑農業によって森林が造成されます。一つの場所で作物と林木が共生するのです。そこで焼畑農業の発展型である農林生産複合、英語でいえば「アグロフォレストリー」(アグリカルチャーとフォレストリーとの合成語)が形成されます。しかもアグロフォレストリーだと造林・育林費用が大幅に削減されます。また、焼畑を含有しない単純林業なら収穫＝収入が得られるまで超長期間じっと我慢していなければなりません。焼畑林業なら早期から中間収入が発生し続きます。しかも後述しますように収穫物が良質だから中間収入の金額は馬鹿になりません。だから日本のみならずドイツでも古い森林は農林生産複合で造成されたものです。ドイツ

語には「ヴァルトフェルトバウ」（造林と農作の結合語）等、焼畑農業を意味する単語が沢山あります。

このように焼畑には利点があり、巧みに生態系の運行を活用した生産様式でありましても、しかし東南アジアや南米や深部アフリカやらで行われているところのオイルパームやコーヒーやらのプランテーション（単一植物だけを栽培する大規模農場）を造成するための開拓である森林伐採と火入れは厳しく批判すべきです。なお申せば、スギならスギだけの林が連綿と続く日本林業をドイツの林業人は「プランテーションだ」と否定的に評します。

第三に、世界的には森林が急速に減少しています。その最大の原因は森林を伐去して農地化することです。つまり開墾である森林破壊です。減少する森林面積の約八割は農地化面積なのです。この人口圧力による食料増産の必要性和多様な恩恵を人類に施す森林の保全という、現状では相対立している目的を同時に叶えるのがアグロフォレストリーですから、国連等国際機関や農業と森林保全とを合一させようとする運動が火入れ式開墾卓越地域におけるアグロフォレストリーの普及活動を懸命に行っているのです。

第四に、焼畑農業は、「単作」すなわち単一作物のみを栽培する普通の農業とは違って、

「混作」すなわち多くの種類の作物を同じ農地で同時に栽培する農業です。換

言すれば、生物多様性の確保を生産行為化するのです。さらに焼畑農業は、「連作」すなわち同一作物を継続して栽培する普通の農業と違って、「輪作」すなわち栽培する作物群を次ぎから次へと替えて行くのです。すると栽培に致命的な連作障害が発生しません。

第五に、「焼畑」と言っても、作付けごとに毎回火入れを行うものではありません。最初の作付けの際のみに、作付け造林のための地拵えとして火入れが行われるのです。さらには火入れ無しの“焼畑”さえあるのです。すると「焼畑」という学者が造語した言葉は実態を表現しません。だから山林での農作を表す「木場作」が適当な単語です。なお申せば木場作の呼称は地域により、作付けする作物群により、それを行う目的により実に多くの慣用語があるのです。ということは木場作が誠に多種多様であったことを示しています。つまり木場作は山村で普遍的に営まれていたのです。

第六に、木場作は施肥も灌水もしません。耕しもしません。まして農薬と除草剤は使いません。だからその産物は安心安全な究極の「自然食品」です。しかも食品としての木場作産物は普通の農産物よりも桁違いに良質なのです。例えば信じられないほど美味しいし、栄養価も極めて高いのです。おまけに普通の農産物の難点が木場作産物にはありません。その典型がほうれん草のシュウ酸問題です。ほうれん草は栄養豊かな食物です。だから病人や妊婦や幼児や老

人やらに向けた食べ物です。しかしほうれん草はシュウ酸の含有量が非常に多いので、例えば腎臓という生存に不可欠な器官を害します。だからほうれん草を一番食べさせたい病人や妊婦や幼児や老人やらは腎臓が弱いので、一番食べさせたくない食材だという極めて皮肉なことになります。ところが木場作によるほうれん草にはシュウ酸が微量ですから、病人や妊婦や幼児や老人やら向きの食材として積極的に採用できるのです。要するに木場作はエコロジカルでエコノミカルでヘルシーでグルメが好む第一次産業なのです。縄文社会はこうした木場作を下部構造としていました。とても狩猟採取のみの社会ではありません。強く言えば、現代文明よりも高度な文明だとさえ私は思うほどです。

野口大兄は『日本原記』でこうした縄文社会の上部構造である精神のありようを、弥生人の精神態度と対比させながら活写されました。したがって同書は、現代文明の行き詰まりを痛感して、現代文明を超克したオータナティブな文明を模索している人にとって必読の労作であります。

## C 日本社会の現状分析

### 1 日本林業の病理

もしお許し戴けるならば、ここで我田引水をいたしたいのです。森林には様々な樹種から成る「混交林」と、スギならスギだけの「単純林」とがあります。背

の高い木もあれば低い木もある「多層林」と、林木が皆同じ高さの「単層林」とがあります。そして木場作が自然に造る混交多層林はすこぶるエコロジカルでかつエコノミカルなのです。単純単層林はこの点ではなはだ劣ります。前者がなぜエコロジカルであるかは説明の必要はありません。しかしなぜエコノミカルかは説明しておきましょう。

木材需要一つとっても、社会が森林に求めるものは実に多種多様です。その上、需要は短期的にも長期的にも激しく変動いたします。単純単層林はこうした多様で変動的な需要に対応しきれません。ところが混交多層林ならいかなる需要にも即応できるのです。その時々に必要な材を森林から抜き出せるからです。だから後者はエコノミカルなのです。日本林業の深刻な衰弱は圧倒的に単純一斉林であることが病因の一つなのです。林野庁は森林には木材生産から災害防止までの多面的な機能があるとしきりに力説しますが、日本の森林と林業の実態を知る私は、「本当かいな」と心の中で呟いているのです。単純一斉林にはそんな多機能発揮を期待できないからです。なぜなら「多機能林業」とは同じ森林で多くの機能を同時に発揮させる営為でして、森林を機能ごとに区分するものでは決してありません。農林生産複合は自ずと多層混交林＝多機能林ですが、森林の機能別区分は個々の森林に単一の効用を発揮させる「単機能林業」に過ぎません。「単機能林業」はあるべき林業である「合自然的かつ近自然的な多機能林



業」の反対極なのです。そして今の日本林業が造成している森林は木材生産のみを目的とする単純単層林ですから多機能林ではありません。だから生産林 vs. 保安林という関係を骨子とする現行の森林管理制度は改正すべきです。

ご参考までに申しておきますと、現在の日本林業はそれが唯一の営林目的とする木材生産すらまともに営めません。そうした日本林業の深刻な混迷の主原因を今日の通説は安価な外材の大量輸入としますが、これもまた事実誤認です。外材は決して安くはありません。安いどころか外材の価格が国産材より大幅に高い場合さえあります。外材より安い樹種の典型が困ったことに日本林業の代表樹種であるスギなのです。ではなぜに安くない外材に国産材が大敗しているかというと、要するに国産材は商品として劣悪だからです。例えば木材は乾燥しないと腐る・割れる・曲がる・短命です。ところが国産材の大部分は無乾燥材なのです。その典型がスギ材です。おまけに材の実寸法は概して表示寸法より少ないのです。そんな材を平気で売るほど日本林業の心理と行動は反倫理的なのですから、品質が劣悪で悪徳商法がまかり通っている国産材を商品と認めないほど市場の評価は低いのです。端的に言えばほとんどの国産材は欠陥商品なのです。なにしろ日本農林規格（日本工業規格の農林業版）の認定製材所は全体の1割ほどなのです。これが「外材時代」と言われるような外材が国産材を圧倒している事態の最大原因です。だから国産材林業は木材の販売価格が造林費を

大幅に下回る赤字体質なのです。そしてこの赤字額は経営規模が大きいほど増額します。なぜなら面積当たりの赤字は規模に関係なく同額ですから、経営面積に比例して赤字総額は増大します。にもかかわらず林野庁は如上の事態が日本林業の病理だとは知らずに、ただただ林業の大規模化を混迷の打開策としています。こうした林政が病状を一層悪化させていることは自明です。要するに現行林政は施策目的と全く逆の政策を採っているわけであります。

だから森の中で森と共に生きている縄文人、したがって森の利用が合自然的で、人間親和的\*で、エコロジカルで、そして森の恩恵をエコノミカルにも満喫していた縄文人の発想と行動を今こそ見直すべきなのです。少なくとも林業に限って言えば、はなはだ遺憾ながら現代は縄文時代より何倍も劣ると私は断言できるのです。

\*「人間親和的」とはドイツ語の“メンシェンフロイントリヒ”。直訳すれば「人間と仲の良い」。当世風に言えば「人間に優しい」。だから“ウムヴェルトフロイントリヒ”＝「環境親和的」・「環境に優しい」という言葉もあります。

## 2 現代日本の制度疲労

しかし問題状況はなにも林業界に限ったことではありません。政界も財界も官界も倫理的に退廃しています。経済も明るくありません。それでいて物質的に

も精神的にも一極集中の格差社会になっています。発作的といってよいほど動機  
の理解不能な犯罪が頻発しています。少なくない国民はそれほど苛立っている  
のです。過労死が政治問題になるほど働いても一般国民は貧しいのです。体制  
はこうした危機的状况に無為無策です。策があるとすれば逆効果の施策です。端  
的な実例がアベノミックスです。好景気だと物価が上昇するのに、安倍政権は物  
価が上昇すれば景気が良くなるという因と果の関係を転倒して、目標インフレ  
率を設定するほど愚かなのです。その上、当節は戦争の焦げ臭い空気さえ感じら  
れます。核軍縮どころか原発規制に対しても日本の政治家・経済人・官僚そして  
大労組のボスといった体制を構築している人間は極めて後ろ向きです。福島原  
発の重大事故という惨劇を生んでも性懲りもなく原発再稼働を追求し、おまけに  
輸出さえしようとしています。さらには関電の“不祥事”です。これほどの破廉恥  
はありますまい。

なお言えば、「原子力の平和利用」という耳触りよい宣伝はとんだ詐欺で、原  
発は核爆弾の緩慢な爆発ですから、核反応を制御できないと原子力発電所は簡  
単に核爆弾となります。このことを暴露したのが福島原発事故であります。しか  
も発電装置を津波は勿論のこと、高波高潮にはなはだしく弱い場所に設置して  
いたのですから、関係者はそれでも「専門家」でありましょうや。まして異口同  
音に「予測不可能」と言いますから、これほど自明の事故を予想できなかった原

子力会社幹部と原子力行政官僚は滑稽なほど無能なのです。

以上要するに日本の体制は激しい制度疲労にあるのです。

## あとがき

野口大兄はこの『日本原記』で、縄文時代を平和な社会であり、縄文人は性格が穏やかで、他者を心よく受け入れ、階層性の薄い社会で、自然の動態を知る生活の知恵があり、だから生活と生業が自然の運行と調べを和する豊かな文明であることを力説されています。

私が現代文明を縄文文明に比して形而上的にも形而下的にも低度ではないかと疑う最たる理由の一つはこうした状況だと申して、この冗漫な駄文を閉じます。